



北海道らしく雪が沢山残る斜面を背景にしました。この斜面の下には川が流れていますが、この川はケア・センターから上流数kmのところから湧き出して流れ始め、またここから数km流れて伏流水になっているという川です。また、後ろの斜面には春にはフキトウや福寿草が芽を出します。

# 変化の中で初心を忘れず

津田 俊彦

日本社会事業大学研究科一九九九年卒業生の津田と申します。私の職場である帯広ケア・センターは、北海道帯広市にある障害福祉サービス事業所(多機能型)で、就労移行支援事業・就労継続支援事業B型・地域活動支援センターを運営しています。もとは精神障害者通所授産施設だったので、登録している

方の多くは精神障害者を持つ方ですが、障害者自立支援法以後、新規利用者のほとんどが知的障害または発達障害を持つ方となりました。

最近の事業の動きを紹介します。私の職場では開設後間もない頃から様々な制度を利用して就労支援に取り組んでいます。その流れを汲んで、就労移行支援事業は積極的な就労支援を行っており、今年度は定員の約半数の人が就職に至りました。今後はこの人達が働き続けられるような定着支援、まだ就職に至っていない人や新規利用者の求職支援、さらには離職した人の相談及び再就職支援などが課題になってきますが、担当スタッフはやりがいを持って取り組んでいます。

就労継続支援事業B型は、ここ数年顕著な利用者の高齢化・多様化に対応するために、これまで大規模に行ってきた農作業中心の活動規模を縮小しつつ、メニューは多様に、かつ工賃を上げていくことを目標に利用者と共に自身の検討を進めています。担当スタッフは利用者とのやりとりの中でニーズを見出すことを学び、鍛えられています。

私自身はサービス管理

責任者という肩書きを持つていますが、個別支援だけでなく、作業活動、販売、バスでの送り迎えなどあらゆる仕事をしており、各スタッフの利用者対応のアドバイスも行っています。利用者が自分の目標を達成するために役に立つ支援ができるよう、スタッフ同士で学び合いながら、初心を忘れず取り組んでいきたいと思っています。

## 津田 俊彦 さん プロフィール

1969年 大阪府吹田市生まれ。  
2000年 日本社会事業大学研究科卒業。  
2000年より社会福祉法人慧誠会帯広ケア・センターにてソーシャルワーカーとして勤務。  
現在はサービス管理責任者として勤務しつつ、就労継続支援事業B型の活動(農作業)も担当している。



就労継続支援事業「フロンティア」の販売活動の場面。昨年度よりイオン北海道帯広店内において、毎月1回販売のためのスペース提供を受けています。この日は職員と利用者で11:00~17:00まで販売をおこないました。最近では認知度が上がったのか一定以上の売り上げが上がるようになり、この日は1日4万円以上の売り上げとなりました。



発行所  
〒204-8555  
東京都清瀬市竹丘3-1-30  
日本社会事業大学  
同 窓 会  
電 話 042-496-3053  
振替口座 00100-9-42448  
ホームページ・アドレス  
<http://www.harajukukai.jp/>

卒業後もずっと社大の一員として  
日本社会事業大学では、卒業生の方々と充実したネットワークを築いています。本学同窓会は、戦前の社会事業研究生、日本社会事業学校研究科・専修科・専門学校、短期大学、学部卒業生、そして大学院の修了生全員で組織されており、同窓会や大学の歩み、会員の活動などの情報を発信しています。



<http://www.harajukukai.jp>

同窓生通信 1



加藤 充子さん (学部43期生)

「原宿会」で現役大学生を初め、卒業生のみならずさまのご活躍を熟視する度に、身が縮まる思いを感じております。私は学生時代、サークル活動に従事し、ピッポやダンス部で主に照明機材を取り扱っていました。今思えば、ゼミやサークル、松窓寮での生活で、たくさんの方とディスカッションを重ねていた日々が今の私の血肉となつていないことは、言うまでもありません。

卒業後、社大卒業生群馬県支部会では、現在の医療・福祉の礎を築いて下さった方々とお会いできるなど、とても貴重な機会をいただくと共に、同窓生の結束を感じております。現在、私は病院のソーシャルワーカーとして仕事をしています。主に脳卒中や神経難病の患者さんを対象とし、急性期から在宅まで一貫した治療を行っている病院です。現在注目されている「チーム医療」も、言葉で表すことは簡単ですが、実際にそれがきちんと行われている現場は数少ないと思います。私が勤務する病院では、MSWは、医師や看護師から指示を受けてから介入するという、受け身の体制ではありません。私たちは自ら患者家族のベッドサイドに足を運び、課題があればそれを他スタッフに発言し、課題解決方法を共に悩み考える。患者家族もチーム医療のメンバーの一員であり、一緒に支える、そんな

気持ち溢れている現場です。当院は昨年、DPC対象病院中機能評価係数Ⅱの値がトップという結果でした。これは、経営を重視し、早く退院させることだけを目的にしているは、なし得るものではありません。経営者は言います。現場で、本当に患者家族のためにいい医療をしていければ、制度は後からついてくる。心強い言葉です。当たり前のことですが、私たちは患者さんを「いち患者」ではなく、もともと個人として生活を支えていた「いち個人」として、適切に考えます。

【プロフィール】  
2003年社会福祉学部福祉計画学科卒業、在学中は須藤陽子ゼミ、「学生児童劇団ピッポ」「ダンス部」「バレーボール同好会」に所属。卒業後、医療ソーシャルワーカーとして「公益財団法人脳血管研究所美原記念病院」に勤務。第18回日本慢性期医療学会にて優秀賞受賞、第38回脳卒中学会総会にてシンポジストを務める。

これからも社大で学んだことを礎に、医療の現場で、個人の生活を共に考え、手当てし、支援していきたいと思えます。

同窓生通信 2



城 千聡さん (学部44期生)

二〇一一年三月十一日。私は務めていた社会福祉協議会で異動の内示を受けていました。それから数時間後、東日本大震災が起きました。震災に向き合える仕事に就きたい、今の震災から離れることはできない、と考えたとき、同僚だった先輩のネットワークで現在の職場の上司から声をかけてもらうことができました。気づいてみれば、どちらも社大の先輩という縁でした。

今回の震災は広域で甚大で、数ヶ月のボランティア活動でどうにかなるとはとても考えられませんでしたが、そこで中央共同募金会では「災害ボランティア・NPO活動サポート募金(ボラサポ)」を創設し、被災した人を支えるボランティアやNPOを支援するための寄付を募り、助成を行なっています。支える人を支えることで、活動が少しでも多く、長く続けられるようになってほしいと願ったのです。私は四月に入職してからですこのボラサポの担当となり、震災に真正面から向き合う日々が始まりました。四月七日に初めて福島市に入った日には震度五強の余震がありました。四月下旬に陸前高田市を訪れたときには、その光景に涙が止まりませんでした。二ヶ月に一度のペースで応募を受け付け、助成を決定するという事務局作業は想像をはるかに超えるものでしたが、こうした被災地の状況を

伝え続けていく必要を強く感じました。そして八月、ボラサポ公式Facebookページを始めました。情報を「伝える」ことだけを目的とするのではなく、その情報を知って、一緒に考えたり共感したりする。そんな発信を目指して毎日更新しています。毎月十一日には「忘れない気持ちをカタチにする方法」として寄付を呼びかけ始めました。震災から二年を目前にした今、毎日震災のことを考えることのできる人は多くありません。けれど、完全に忘れてる人も多くはいません。震災直後の「自分が何ができるだろう?」という気持ちを忘れず、今もできることがあることを伝えていけたらと思っています。

【プロフィール】  
●2003年/社会福祉協議会のボランティアセンターでボランティアコーディネーターとして勤務  
●2004年/社会福祉学部福祉計画学科卒業  
●2011年/中央共同募金会企画広報部でボラサポを担当  
●ボラサポFacebookページ  
<http://www.facebook.com/borasapo>

ロンドンパラリンピック出場

秋元 妙美 選手  
ポッチャ Team BC1/BC2  
7位入賞



写真/戸山サンライズより

昨年八月、ロンドンで開催されたパラリンピックにポッチャ競技で出場しました。社大在学中に体育実技の非常勤講師であった渡辺美佐子先生を通じてこの競技に出会い、以来、パラリンピック出場を目指し続けてきました。競技者として世界の最高峰の舞台に立ちたいと思うのは当然ですが、私にはもう一つ理由がありました。それは重度障害者が自らの夢(目標)を持って地域で当たり前に生きるという二石を投じたかったのです。

二つの自立生活センターで、当事者スタッフとして七年間の経験を経て、現在、CIILちようふを立ち上げて活動しています。重度障害者の地域生活のサポートにかかわる中で、地域で暮らすことすらままならない現実と向き合いました。仲間の多くがそんな状況下でもがいているのに、自分が夢を追いかけることに罪悪感があった時期もありました。しかし、自分が夢を実現させることによって、制度を活用して地域で暮らし、環境を整えていけばいるんな可能性が開け、社会的貢献につながることを実証したいと考えるようになりまし。自立生活運動の一端を担うつもりでやってきました。今回は多くのメディアに取り上げていただいたことで、ほんのわずかがかりその働きがけができたと感じています。メダルには届きませんが、七位という結果で入賞を勝ち取りました。本当に多くの人のサポ一

トがあつてのことで、その中には社大OBも多くいます。そして、かかわってくれた全員がボランティアではなく、支援者でもなく、一緒に夢を追いかけてくれたことが、何よりも誇りに、そしてうれしく思います。障害者福祉においては、この感覚が必要かつ重要なのだと実感しました。今後の活動に生かしていきたいと思ひます。

最後に、この場を借りて申し訳ないですが、今大会出場にあたり、教職員並びに同窓会の皆さまに、ご寄付と応援をいただいたことに、感謝申し上げます。ありがとうございました。

【プロフィール】

- 東京、大田区生まれ。
- 2000年度/日本社会事業大学社会福祉学部福祉援助学科卒業。3年生の時、旅行気分てCPの国際陸上大会に参加し、それがきっかけでポッチャを始める。
- 自立生活センターにかわり、介助者を使つての自立生活を始める。その後、実習・パートスタッフを経て、CIILちようふのスタッフとして活動に携わる。
- 2008年/北京パラリンピックではNHKでポッチャを解説
- 2010年4月よりCIILちようふの代表として活動している。
- 調布市障害者地域自立支援協議会ワーキンググループメンバー。
- 2011年8月、ポッチャワールドカップにて、日本チーム初の銀メダル獲得に貢献。ロンドンパラリンピックポッチャ日本代表

小山 恭輔 選手  
競泳50メートルバタフライ  
銅メダル



銅メダル 水泳(男子)50mバタフライ 小山 恭輔さん(平成21年度卒業) 7位入賞(ポッチャ) 秋元 妙美さん(平成22年度卒業)

大学を卒業したのが三年前。ついでこの間のような気がしています。

中学二年の時に脳梗塞を発症して障がい者になった自分が大学を目指す時に、自分が病気になるまで多くの人に支えられてここまで来たのだから、自分も人のために役に立ることが出来るのかと社大を目指したのです。

在学三学年時、北京パラリンピックに出場することになった。あの時は大学の皆さんにたくさんの応援を頂きパワー全開で大会に望みました。壮行会や北京で応援、成田空港の迎え、そして祝勝会と言葉に出来ないくらいの感謝の気持ちでいっぱいでした。

大会後、もう少し世界の選手と戦いたいので競泳

を続けたいと思うようになりまし。しかし北京後は、学生

だったこともありメダル獲得に浮き足立ち目標を見失しない、就職で環境も変わったことで練習も怠ってしまひました。

二〇二年、気づけばロンドンパラリンピックの一年前になっていました。海外や国内の大会に出てもことごとくタイムが出ず正直焦りました。でも諦めたくなかつたので必死に練習を継続していきまし。どうにか出場が決まり、卒業しているのに大学から壮行会をしていただいた時は、身の引き締まる思いでした。

結果としては、北京で銀メダル、ロンドンで銅メダル。しかし今回自己ベストなしというのが悔しいので

三年後リオ大会でリベンジしたいと思っています。

現在は、転職し医療機器関係の会社で働き、午後は練習をするという最高の環境を与えてもらっています。そして三年という時間を大切に「継続は力なり」で頑張りたいと思ひます。

今年国体が東京開催なので東京都代表になれるよう頑張ろうと思ひます。三年後にリオ大会、七年後日本でパラが開催されるのなら出てみたいと思つています。



【プロフィール】

- 1987年生まれ
- 在学中 社大福祉ネットワーク障がい局所属
- ゼミ 佐藤久夫先生ゼミ
- 2008年北京、2012年ロンドンで開催されたパラリンピックに出場
- 2016年リオパラリンピック出場が目標



# 被災支援ボランティアセンター 気仙沼カフェ

## 1 気仙沼カフェって？

大学にいてもできる被災地支援ボランティアとして一人300円会費で、宮城県気仙沼市から取り寄せたお菓子やコーヒー、ココアを提供しています。“現地の商品を買う、カフェでの売上・募金を送る、震災を忘れない、大学にいても参加出来る、継続して行える”などのコンセプトをもとにお昼休みの時間帯を利用して生協喫茶室で行っています。活動主体は去年大学主催のボランティアバスに参加した2年生を中心とした「学生有志復興支援ボランティア Cocoa」のメンバーです。「Cocoa」では毎年12月と3月に宮城県気仙沼市・東松島市へ現地の児童館や仮設住宅地に訪問し、小学生を中心に子どもたちへ遊びを提供する活動を行っています。



2012年12月クリスマス会に行ったメンバー



気仙沼カフェの様子です。毎回たくさんの方が来てくれます。

## 2 気仙沼カフェ活動メモ

「学生有志団体復興支援ボランティア Cocoa」

- 2011年 12月 クリスマス会  
宮城県気仙沼市大島（児童館）  
東松島市（仮設住宅地）
- 2012年 3月 春のあそび会  
\*クリスマス会と同所へ訪問
- 6月 ・月1回定期的に気仙沼カフェ開始  
6月13日から月に一回で気仙沼カフェを始める  
(1月17日までに計7回延参加人数約600名)  
・学内学会にて活動報告
- 9月 学祭にて気仙沼カフェ実施
- 12月 クリスマス会  
宮城県気仙沼市唐桑（児童館）  
東松島市生活復興支援センターにて  
復旧作業ボランティア
- 2013年 3月 春のあそびの会  
宮城県気仙沼市・東松島市へ訪問予定



社大祭にも参加し、清瀬市長や地域住民の方々など約200名が訪れてくれました。



2012年3月宮城県東松島市の仮設住宅地にて（春のあそびの会）



2011年12月宮城県気仙沼市内の児童館で行ったクリスマス会の様子です。

## 3 これからの活動について

震災からまもなく2年目をむかえようとしています。現在多くのマスメディアは当時のように現地の様子や状況を頻繁に伝えることを止め、我々の意識の風化が進んでいるように思います。年を重ねるごとに現地では精神的な疲労が蓄積しているかもしれません。私たちは今までの活動を継続し、社大の学生を中心に現地の状況を伝え広めること、これからどんな“助け”が必要かを考え活動していきたいと思っています。



制作物や学祭などのポスターなど

## 北海道支部

### 2012年 北海道同窓会秋季セミナー開催

北海道にも初雪が訪れた11月17～18日(土・日)、本学より、伊藤同窓会顧問、畑戸校友会室長補佐を迎え、標記を道東・帯広市にて開催しました。参加は、17人でした。

第1日は、村上新会長のあいさつに始まり、続いて伊藤顧問が「今だから語れる社大の歴史」を2時間に亘って熱弁。参加者から笑いあり、頷きあり、感動ありの素晴らしい講演でした。次に、畑戸氏が「社大の現況と展望」と題して、パワーポイントを駆使しての報告を行ってくれました。

この後、臨時総会を開き、村上体制の許での同窓会活動の強化(母校との関係強化や北海道同窓会活動の活性化など)及びそのための体制確立を確認しました。夜は、何と2時半までの懇親会となりました。

翌日は、村上会長率いる帯広慧誠会の事業所及び施設を観て回り、帯広の老舗料亭で昼食会となり、食後、解散しました。

このたびのセミナーでは、帯広の卒業生を発掘したり、早々と1月の交流会日程が確認されたり、伊藤さん揮毫による「アガベ」(北海道



支部紙)の発行など、新体制に相応しい出発点になったと思われます。また、次年度セミナーは10月に道央・小樽開催となりました。今後の、北海道支部の活動にご注目を!  
(文責・高田)

## 奈良県支部 第11回支部会

日時：2012年8月19日(日)／会場：「月日亭 近鉄奈良店」

### 【会員の近況(敬称略)】

#### ● 杉村淑子(専修科14期)

ひざやくるぶしの関節炎といわれたり、心臓が悪いのではといわれたり、年はとりたくないものです。仕方がないので、マイペースの生活を送っています。それにしても昨今の福祉の現状、50年前の社大での授業がしきりと思ひ起こされます。

#### ● 松本律子(学部10期)

いつもお世話になりありがとうございます。少～しの仕事を続けながら、頭も身体も「ラク」にすごしております。

#### ● 諸田純夫(学部10期)

本日(8月12日)帰郷いたします。妹が障害者施設におり、彼女の盆帰省を群馬で受け入れるためです。相変わらず奈良と群馬を行ったりきたりの生活をしています。皆様によろしくお伝え下さい。

#### ● 河合にしほ(学部25期)

今年は何か勉強を始めようと思っていましたので、再チャレンジすることにしました。夏の行事に浴衣を着ることになり思いがけず教えて頂けました。次は着付けをと思っているところです。

#### ● 岡本晴子(研究科52期)

かわらず県社協で地域福祉課に勤務しています。県内の地域をまわりながら、山間から平野部までさまざまな地域での暮らしにふれる日々です。

#### ● 渡辺一城(学部30期・院前期5期)

今回はまた「8月最終日曜日」の恒例をはずし、また案内が遅れ申し訳ありません。

1年前からFacebookを始め、学生時代や前職でお世話になった多くの方々、天理大学の卒業生・在学生らと交流し、楽しく勉強させてもらっています。よろしければ今回の支部会も写真含めてアップさせていただきますので、ご了承下さい!

## 静岡県支部

### 静岡県SW協会・日社大共催公開セミナー報告

2012年12月22日(土)静岡市内において、静岡県ソーシャルワーカー協会と日社大・同窓会支部共催の公開セミナー及び交流親睦会が開催されました。

静岡県SW協会(役員の半数は日社大同窓生で構成)は、昭和59年協会設立以来、専門資質向上と関連分野との連携・情報の共有の為に、毎月研修会や国家資格取得勉強会を開催したり、毎年会報の発行等を継続実施して来ました。

その結果、静岡県内ソーシャルワーカー関係団体間の連携活動が定着化したので、県SW協会としての初期の目的は達成したものと認めて、その協会解散総会を記念して、公開セミナーと交流会を企画したものです。公開セミナーでは日社大潮谷理事長のご挨拶の後、大橋謙策先生の「地域主権時代の自立生活支援とコミュニティソーシャルワーク」と題しての記念公演が行われました。

公開セミナーには静岡県内ソーシャルワーカー関係者(同窓生を含めて)80名、その後の交流親睦会にも30名の出席がありました。

開催時期が歳末のあわただしい中であつたのか、同窓生の参加が10数名と予想外に少なかったのが少しさみしく思いましたが、参加者からは意義ある企画と大変に好評でした。

静岡県SW協会長 神田 均(研究科・7期生)



## 栃木県支部

### 障害者福祉改革の動向をめぐり講演会 講師に母校の佐藤久夫教授

栃木県同窓会支部(石橋俊一会長)は、5月19日に宇都宮市内のホテルニューイタヤで総会を開催した。

総会に先立って、母校の佐藤久夫教授の講演会を開催した。テーマは「障害者福祉改革の動向と今後の課題～障害者自立支援法から障害者総合福祉法(仮称)～」であった。

聴衆は同窓会会員に限らず、行政当局者をはじめ社会福祉協議会関係者など幅広く呼びかけ、約100人が参加した。就任したばかりの潮谷義子理事長も参加し意見も述べ、全国の同窓会支部で初のデビューとなった。

「原宿世代から清瀬世代へ」をモットーに総会開く  
新たに就職相談会を開き後輩たちへ貢献

総会では、昨年度から本年度にかけて取り組んだ、①平成24年度栃木県出身の入学生の歓迎会および在校生を含めた交流会を合同で初めて実施したことが報告され、反響を呼んだ。さらに、今後は栃木県内の卒業生の協力を得て、在校生を対象に「就職相談会」を実施することも提案され、満場一致で採択され、今後の活動が注目される。活動のモットーは、「原宿世代から清瀬世代へ」で今後の活動が期待される。  
(事務局長 青木英典)

## 岐阜県支部

9月29日(土)に久方振りの支部会(下呂)を開催。母校から大橋謙策同窓会長(元学長)に出席いただき、「教育と福祉を考える—新たな社会哲学・社会システムとソーシャルワーク」と題する講義を拝聴。

岐阜国体開催と同日となったが、交通・宿泊とも支障なく、岐阜県支部会員が愛知県支部会員の同行や、原宿世代が母校学生課で世話になった伊藤博胤同窓会顧問の出席もあり、盛り上がった会となった。新支部員に、阪野貴氏(学部10期・1970年卒・中部学院大教授)を送出した。いささか残念な思いをしたのは、呼びかけの案内に返事がいただけなかった支部会員がおられたこと。支部活動に支援いただいた会員はじめ、同窓会本部・母校に感謝したい。

支部長・横川満雄(研12期・1958年卒)

愛媛県支部

愛媛県では、私が支部長になって以来、全く同窓会も開けていない。関東から遠い愛媛では会員は少ない。要するに「名ばかりの支部長」である。仕事を辞めたので、同窓会に少しはお役にたてるかなと思っていたが、その時には病気をしてお役にたてない身体になってしまった。うまくはいかないものである。

今回、支部長を交代してもらうにあたって、何かお役にたっておこうと思い、四国の支部長さんに連絡をして、四国地区の同窓会が開けないかという相談をするため支部長会をしてみた。同じ四国なのに初めて他県の支部長とお会いした。各県の状況について報告し合った。支部を最近作ってこれからやろうと意気込んでおられる支部もあったが、愛媛と同じ悩みを持つ支部もあった。同期会ならまだしも同窓会となると難しいという意見には共感できるものであった。みなさんも何とかしようという気持ちは同じなのだが難しいものである。四国地区で同窓会をしようと提案してみたが、趣旨には賛同できるが、支部でさえ難しいのに地区同窓会なんて・・・というのがみんなの意見であった。

しかし、「せめて支部長さんだけでも集まって共感し合おう」という事は一致できた。まずはここから始めようという事になった。また、各県で会員が集まる機会があれば誘い合おうということも共感できた。「同窓会なんて・・・」と面倒に思うことも多いが、特にご高齢の方は楽しみにしているようだ、という意見も聞かれた。名ばかりで何もすることが多いが、一人でも楽しみにしている方がおられる限り、同窓会には意義があるのだと感慨深い一日であった。

(愛媛県支部長 徳永・学部11期)

学部5期同期会 IN 鎌倉

～初冬の鎌倉で開催～

晩秋の鎌倉の紅葉が残っていると確信して、師走の3日に開催した5期会は、季節は正直なもの、見事裏切られ、雨交じりの寒さに、新潟より寒いと酷評される始末でした。同窓会から伊藤博胤さんをお迎えして、北は札幌、南は沖縄から総勢35名が参加しました。安保の翌年の昭和36年原宿キャンパスに入学し、ほぼ古希を過ぎた者たちが、原宿時代にタイムスリップして盃を交わし、KKR鎌倉わかみやで一晩を過ごしました。年齢的に見て、これが最後の同期会になると思いきや、余生が少なくなったからこそ振幅を縮めて、また早い機会に参集しようという要望が強く、開催地を東京に固定して、生きている者が輪番で幹事を務める方向が示されました。酒が進むほどに社大魂は健在で、5期生の心意気を彷彿とさせる一幕であったと思います。

(文責 御厨)

長崎県支部

長崎県支部総会及び同窓会を開催しました。  
(日時) 平成24年11月23日(金) 18:00～20:00  
(場所) 長崎県諫早市永昌東町13-29  
L&Lホテルセンリュウ  
(長崎県支部長 平光 八郎)



島根県・鳥取県支部合同

10月27日(土)に大橋会長ご来県のを機会をとらえ、「大橋会長を囲む会」と称した会合を持ちました。  
鳥取県支部にもお声掛けし、島根4名、鳥取2名の会員が参加し、和やかな会となりました。  
(島根県支部 岩崎・学部30期)

学部9期生の同期会を開きました

2012年9月29日(土)秋晴れ、残暑厳しい午後、学部9期生の同期会を開きました。13年ぶりの再会でした。中には43年ぶりの方もいました。小川政亮・正木健雄・横山和彦の各先生方が元気な姿を見せていただきました。

私たちは、40年間専門分野で仕事をしてきて各自がどんな「まとめ」をするか、なにが出来たのか?第二の人生をスタートする年齢でもあります。これから何をするか。

社会福祉構造改革を中間管理職として推進する立場にたたされた経験者や、身近に当事者を抱えて起業した方、新しい分野を開拓して苦勞してきたこと等々、話は尽きませんでした。原宿しが知らない方には「新校舎」を同窓会事務局の畑戸氏に案内していただきました。

出席者は24名、特に今回は、遠方から出席された方が多かった。13年前は原宿の玉川寿司に80名も集まり、今回も・・・と期待したのですが、それぞれ「90歳を過ぎた親から目が離せない」「東京から福岡まで姉妹で定期的に親の介護している」「初孫で娘の応援」、あるいは「まだ現役や新しい職場で行事を控えてとも休めない」「30歳過ぎの娘を亡くして出席できる心境にない」等時代を反映して欠席も多くなりました。しかし、殆んどの方が近況を伝えて来てくれたことは大変うれしいことでした。

なお、各先生方々、各自の話をDVDに収録し希望者に有償で配布します。郵送料を含めて千円で配布します。(名古屋 修)



総務委員会の活動報告

前号におきまして、今年度は①支部活動への支援強化と②情報発信・情報交換の拡充に取り組んでいくこととお知らせさせていただきましたが、今号では、これまでの取組の経過と今後の方向性についてご報告させていただきます。

① 支部活動の支援強化

来年度から地方支部のブロック単位で本部と共催の大会を順次開催することとして、いくつかの支部に働きかけをさせていただいております。現在のところ、開催日程・場所ともに決定には至っていませんが、できる限り早く皆様にご報告できるよう、鋭意調整を進めています。

大会の開催に当たっては、同窓会長や母校学長・教員の派遣にかかる調整や、派遣や会場使用料、広報、資料作成等にかかる費用を五味基金から負担する等の支援を本部から行うことを考えています。

具体的な内容が固まっていない段階からでも結構ですので、開催希望がございましたら、校友室までお気軽にご連絡ください。

② 情報発信・情報交換の拡充

現在のところ、ホームページの再構築と合わせて、どの程度情報発信・情報交換機能を組み込んでいくか、業者を交えた検討を行っています。今後の情報発信や維持管理の方法と費用対効果を考えながら調整を行っておりますが、ホームページに関する皆様からのご意見・ご要望がございましたら、校友室までお寄せください。

また、名簿作成につきましても、来年度中の作成を目途として調整を進めています。作成に当たっては、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

同窓会副会長・総務委員長 竹田幹雄

# 同 窓 会 通 信

同窓生の皆様、お元気でしょうか。  
今回もホットな母校・同窓会の出来事をお伝えしていきます。

## 同窓会の皆さまへのご挨拶

日本社会事業大学学長 大嶋 巖

昨年10月より日本社会事業大学学長に就任した大嶋巖です。同窓会の皆さまへひと言ご挨拶申し上げます。

本学教授に就任してまだ7年目ですので、馴染みのない方もいらっしゃるかと思いますので、まず簡単に自己紹介をさせていただきます。

本学では、社会福祉学部で精神保健福祉士課程主任を務めて来ました。力量ある精神保健福祉士を生涯にわたって育成することを目指し、実習・演習教育をより実践的なものにするとともに、卒業後も「勉強会」や「フォーラム」など、卒業生が大学に戻って来ることのできる機会を多く持つよう心がけています。また大学院社会福祉学研究科では5年前から研究科長を務めています。福祉現場に影響力のある実践研究ができる人材を養成する教育体制を整えるとともに、福祉プログラム評価履修コースを新設し、根拠に基づく効果的実践が全国各地で行えるよう、教育と研究、実践支援が連携した体制構築を目指して来ました。

もともと専門は保健学ですが、大学院生時代から当時原宿にあった社大にはしばしば通い、福祉の原点を学びました。当時勉強会等で一緒した友人や仲間には、いまや福祉教育界の重責を担っている方も少なからずいます。本学は私にとって第二の母校のような存在です。

さて、私が学長に就任して目指していることは、本学が「力量あるソーシャルワーカーを生涯にわたって支援する日本とアジアの福祉実践支援と社会福祉教育の拠点大学」になることです。詳しくは大学ホームページ「学長メッセージ」

<http://www.jcsw.ac.jp/gaiyo/message.html>

をご覧ください。この新しい取り組みを実質ある形にするには、実践現場と大学の緊密な連携・協働が不可欠です。またそのための人材として社大同窓生の皆さまのご支援・ご協力は必須の要素と考えています。

近年、社会福祉界における社大の存在感が相対的に小さくなり、大学の中でも内輪もめのような話が伝わって来るとご心配される同窓生の方もいます。しかし、私は社大の持つ可能性と潜在的な力量は原宿時代と変わらないと考えます。当時と同じか、それ以上の輝きを本学が社会に向けて発信するためには、先ほど触れた新しい社大のゴール達成に向けて、同窓会の皆さまをも含めた「チーム社大」が一丸となって取り組みを進めることが肝要だと考えます。

同窓会の皆さまの今後ますますのご支援・ご協力を、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

## 社大スナップ集



松窓寮祭



アガベ像



スタディツアーフィリピン



社大祭



## 告 示

幹事会予定  
6月22日(土)  
10時半～13時

支部長ほか役員の方、  
ご予約されますよう。

## 社大福祉フォーラム2013 プログラム(案) 6月22日(土)・23日(日)

(第52回 日本社会事業大学社会福祉研究大会)

テーマ 「希望としてのソーシャルワークー記憶・くらし・再生ー」

9:30	10:00	10:15	10:30	12:00	13:00	14:30	15:20	16:00	16:45	17:00	18:30
受付(講堂)	開会式	新任教員紹介	教員研究報告	総会	休憩	基調講演	名誉教授授与式 贈呈式 木田賞 学生研究激励賞	木田賞 記念講演	サークル セッション	移動 時間	懇親会

▲ 1日目 6月22日(土)

学内学会の1日目  
基調講演の講師  
椎名誠さんに決まりました。

2013年度社会事業大学研究大会の発表募集について(ご案内)  
社会福祉研究大会における発表を募集しています。  
発表を希望される方は下記よりお申し込みください。

【申込締切り】2013年4月末日(必着)

※締切り厳守にてお願いします。発表者には後日詳細をご連絡いたします。

【申込宛先】日本社会事業大学交友室 学会事務局  
TEL042-496-3053 FAX042-496-3051  
E-mail kouyu@jcsw.ac.jp

▼ 2日目 6月23日(日)

9:30	10:00	12:00	13:00	15:00
受付(教学A棟)	分科会 自主企画	休憩	分科会 自主企画	

ルポルタージュ

原点は社大

吉田 勇次郎 (学部二期)

就労支援事業に関わられているようですが、なぜこの道に？

兄が脳性マヒで施設入所しており、不自由な体ではないものかと考え、社大に入学し、「障がいを持つ人が働くこと」をテーマ勉強してきました。四回生ではこの三月で退官される佐藤久夫先生のゼミでした。

卒業後は知的障がい者更生施設に勤めた後、平成三年に障がい者自立支援企業有限会社愛和环境を設立しました。どんな障がいがあっても働ける場、生活できる



プロフィール よしだ ゆうじろう 昭和60年日本社会事業大学卒業後、知的障害者更生施設指導員に。その後、平成3年に富山市で障害者自立支援企業・有限会社愛和环境を設立。現在は特定非営利法人愛和報恩会理事長、地域共働作業所「報恩の家」所長として知的障害者の授産施設の活動を展開。過疎化する中山間地域で障害を持つ人の就労支援を実践する福祉作業所とケア・グループホームを運営し、水田と畑作に取り組み、地域農業を守りつつ、その加工品を生産し、農家レストラン、喫茶店を運営し、地域活性化と維持に取り組んでいる。

場を自分達で創ろうを合言葉に始めた会社でしたが、たちまち経営に行詰り借金だけが残りました。

その後平成九年に愛和報恩会を設立、平成五年にNPO法人としました。

現在、多機能型就労支援事業所を継続A型、B型、移行の合計四〇名定員で運営しています。また、ケア・グループホームが五カ所(定員四二名)あります。

事業展開にはどんな思いがありますか？

みんなの生活経済を支えるための工賃の向上は就労支援事業所の使命です。作

業として米、野菜作りとその加工を行なっています。

活動の拠点、八尾町野積地区は準限界集落と言われる中山間地域です。過疎化、少子高齢化、農業後継者の不在、耕作放棄地の増大といった課題が山積です。

私達の取組みはそうした課題への対処と合致しており、障がいを持つ人達の力で崩壊しつつある地域社会の維持、活性化の「翼を担う」とともに、彼ら、彼女達の誇りと生きがいになればと考え実践しています。

また、ケア・グループホームにおいて規則正しく、心身ともに健康であるための生活習慣の修得を目指しています。自分でできることを自分でできるように支援しています。さらに、地域で生きていくためのルール、常識、やっ

ならぬものです」をきちんと伝える必要性を痛切に感じています。

学生時代はどんな思い出がありますか？

富山から上京した日、すぐ男子寮に入るべく希望杯地図を見ながら大学の寮らしき建物を探して歩き回りましたが見当たらず、「まさか？これか？」と入って見た所が第二松窓寮でした。新入寮生歓迎コンパで全員が「升酒の早飲みをさせられたのには参りました。それ以後も連日先輩方から寮で、鳥八で鍛えられました。また、すでに卒業された先輩が寮を訪れ「俺は三浦だ」と館内放送が流れると寮内は騒然。今夜はどうなるのかと恐怖と期待？に混乱したものです。新宿の「白い部屋」は、今も忘れられません。

福祉とは何ぞや、かつこつけるな泥臭く生きんかい、アマツと厳しくも優しい先輩達。今思い返してみても「授業では学べない」社会福祉を目指す者としての心得を伝授していただきました。

また、野球とアルバイトに明け暮れる日々でした。豊島区の公衆トイレを朝掃除し、掃除道具を積んだ便所号(ホンダスーパーカブ)に乗って明治

通りを突っ走り、大学の授業を受け、野球の練習が終われば夕方また便所号に乗ってトイレの掃除をし、湯島の居酒屋「天豊」で焼鳥のアルバイトをする生活でした。当時のお金で月二十万円稼く時もあり、就職した時の給料の安さに驚きました。そんな生活で、単位が順調に取れるはずも無く五カ年計画で卒業しようと考えていた四回生の時、研究科生として勉強に來られた山崎忠顕さんとの運命の出会いがありました。当時北海道の札幌報恩会銀山学園(野村健園長・社大先輩)の副園長として勤務しておられ翌年知的障がい者の高齢者対応施設の運営を始めるとの事で勉強に來られたのです。

男子寮で二年間一緒に生活していく中で、「北海道へ来い、俺に命を預けろ」と強いお誘いを受け卒論を残すだけというところまで単位を取って津軽海峡を渡りました。その後病氣もしましたが、五年間大江学園で働き、富山へ帰ることになりました。その際も伊藤博胤先生の計らいでめひの野園(中田勉園長・社大先輩)の施設へ勤務することができました。

振り返ると、全てのことがかしら社大に繋がりがながら

今に結びついています。

今後の抱負をお願いします。

今私達が取組んでいる就労、生活、教育研修といった支援を総合的に体系化した、実社会へ羽ばたくためのカリキュラムを創りあげたいと考えています。

就労支援では実作業をおして様々な作業技術や働く場でのマナー、ルールを学びます。

生活支援をとおして、家事全般ができることはもちろんのこと、お金の管理や地域で生活していく上で必要な町内会、近所とのつきあひ方、社会資源の活用方法等について学びます。

教育研修では、一般教養常識、やって良いこと悪いこと等犯罪と刑罰等社会のルールを学びます。

また、心身の健康のため障がいや病気について学ぶ機会を設け、自分自身をしつかり受け止めてもらいます。特にこのころの療育のため、内省教育、内観療法に二層の力を入れます。

まだまだ試行錯誤の状況ですが「実践をとおした学びの場」として社会のために役立てればと思います。 これまでも、これからも始まりはいつも社大です。